

書籍紹介

『悲劇の宗政家 前田誠節
臨濟宗妙心寺派の近代史』

藤田和敏

この書籍を

お勧めする理由

事務局員 木下紹胤

この度、藤田氏の書籍を手
に取るきっかけとなったの
は、花園大学に勤める方から
の勧めでした。「これは歴史
的事実を述べたものであり、
現在の妙心寺派がいかに形成
されたのかを知るための良
書」とのことでした。

書籍の内容については、著
者本人から拝受した寄稿文を
ご覧いただきたく存じます
が、私が本書をお勧めしたい
理由は以下の三点です。まず
一つは、明治の廃仏毀釈に
よって危機に立たされた当時
の日本仏教界の光と闇が、あ
りのままに描かれているとい

う点です。例えば『明治の禅
匠』（禅文化研究所）で取り
上げられている宗匠方と異な
り、前田師をはじめ日の目を
見られなかった一人ひとりの
禅僧の血の滲む努力が、現代
の宗制の成立に大きく貢献し
ているということを再発見で
きます。

二つ目は、当時から課題と
なっている人材教育、僧侶の
資質向上、本所のシステムな
ど、今に直結する問題が浮き
彫りにされているという点で
す。これらの考察を現代に活
かすことが私たちの役目であ
ろうと思います。

三つ目は、前田誠節という
一人の禅僧の生き様に、僧侶
としての根本を見直すことが
できるという点です。寺院は
毀されても法は毀すことがで

きない、この一念を持って改
革に邁進した前田師と同じ気
概が今の自分にはあるだろう
か。特に、晩年の前田師の布
教伝道に対する真摯な姿には
胸詰まるものがありました。

「世人は何かに下評するか
は関する所にあらず、吾人は
仏道のため、これ法のため、
最大最善最勝最利なりと信じ
たることを施行したりし也、
而して又多数の人に代りて最
劇最痛の苦しみを受けし也、
一点の疚しきことあることな
し、百年の後知る者は自ら知
らん」（本書 一七六頁）

本書の「あとがき」に藤田
氏がこの本を執筆する経緯が
書かれています。私たち僧
侶はいかに布教していけばよ
いかという課題に向き合う上
で、本書は大いに寄与するも
のがあります。ぜひ多くの方
々に、読んでいただければ幸い
と存じます。

以下は著者の藤田和敏氏か
ら頂いたこの書籍についての
紹介文です。

現在の臨濟宗各派では、「本
山」・「本所」という二つの組
織によって末寺が統轄されて

いる。現代を生きる僧侶に
とっては当たり前の事実であ
るが、このような宗派のあり
方は歴史的にどのようなに形成
されたのであろうか。そのこ
とを解き明かしたのが、拙
著『悲劇の宗政家 前田誠節
臨濟宗妙心寺派の近代史』で
ある。

禅宗各宗派にとって、「本
山」とは法系の源となる寺院
のことを指す。妙心寺派であ
れば、開山関山慧玄を祀る開
山塔と、全国の末寺に法系を
張り巡らせる龍泉庵・東海庵・
靈雲院・聖沢院の四派四本庵
を擁する妙心寺こそが「本山」
である。法階稟承などの様々
な宗派内の行政は、元々は「本
山」が管轄するものであった
が、明治九年（一八七六）に
妙心寺派が成立し、同十二年
に妙心寺派大教院（のちに教
務本所、現在の宗務本所）が
創設されたことよって、「本
山」から「本所」が分離して
現在のあり方になった。

「本所」というものは、まっ
たく近代的な組織である。「本
山」が大きな権限を握る江戸
時代の本末関係を当然として
いた明治前期の僧侶にとっ

て、末寺住職に平等な権利を
与えた議会を組織し、「本所」
の役職者を選挙で決定してい
く方法は革命的なものであっ
た。社会が大きな変化を遂げ
た明治時代において、議会の
ような近代化された宗派運営
の手段を編み出すことは困難
を極めたが、その難題に体当
たりで立ち向かったのが前田
誠節である。

本書の書名になっている宗
政家とは、宗派の運営におい
て政治的な役割を果たした僧
侶という意味である。ペリー
による黒船来航から四年前の
嘉永二年（一八四九）に生ま
れた前田は、幼い頃に両親と
死に別れるが、妙心寺末寺で
ある伊勢国山田の常勝寺で出
家得度した後、美濃国梅谷
寺における厳しい修行を経
て、妙心寺派の宗政家として
頭角を現した。明治十八年
（一八八五）に制定された妙
心寺派最初の宗派規則「妙心
寺派憲章」の起草に関わりと
ともに、同十九年にまとめら
れた「妙心寺派住職試験章程」
の内容を策定するなど、宗派
の基盤構築に主導的な役割を
果たしたのである。

「妙心寺派憲章」制定に伴い、妙心寺派では定期的に議会を開催して運営方針を議論することになった。教務本所を代表する立場にあった前田は、宗派自治の確立に強烈な問題意識を抱き、改革のための議案を矢継ぎ早に提出したために、保守的な地方の議員たちと抜き差しならぬ対立を抱えることになった。しかし、四派四本庵のうちの東海庵を拠点とする東海派の法孫であり、東海派の勢力が浸透していた尾張・美濃地方の末寺を支持基盤として固めていた前田は、抵抗する勢力と闘いながら、自らが理想とする改革の実現に向かって邁進したのである。

前田の辣腕振りは宗派外でも注目され、仏教各宗派の管長と執事で構成される仏教各宗協会の大会で議長を務めた。宗派内外で活躍する前田の動きに妙心寺派の議員たちは警戒を強め、議会において前田は厳しい批判にさらされることも多くなった。宗派運営が膠着状態に陥りつつあったこの時期に、インドで発見された仏骨（仏舍利、「仏骨」は資料上の表記）がシャム国王チユラーロンコンから日本に譲与されることになり、その奉迎使を前田が務めることになった。さらに、仏骨奉迎のために仏教界が連合して組織した日本大菩提会が明治三十一年（一八九八）に発足し、奉安殿である覚王殿の建設が予定されたが、参加各宗派の無責任と杜撰な運営により債務のみが累積する結果となった。会務を抱え込んだ前田は債務処理に苦慮することになり、妙心寺派の基本財産であった公債証書（現在の国債に当たる）を弁済のために不正な手段で流用し始めたのである。

覚王殿は、紆余曲折を経て、覚王山日暹寺と名を変えて名古屋に建設されることになった。前田は、運営主体が代わった日本大菩提会に十三万円余（現在の貨幣価値に直すと二十六億円余）に膨れ上がった債務の弁済を求め、全額を負担させることができず、進退窮まった。そして、明治三十七年（一九〇四）に管長に対して進退伺いを提出したのである。前田は教務本所から擯斥の処分を受けるとともに刑事告発され、同三十八年に重禁錮一年六ヵ月・監視六ヵ月の刑罰が言い渡された。出所後は岐阜県の正伝寺（現在は廃絶）に隠棲し、大正九年（一九二〇）に死去している。

以上のような前田の事跡に多くの問題点が存在したことは否定できない。前田が推進した諸改革は末寺の事情を十分に顧みないものであり、その強引さが原因で議員からの抵抗を受け、失敗を繰り返したのは事実である。仏骨奉迎事業への参加は莫大な債務を抱え込む結果となり、宗派財政を危機的状況に陥らせた。しかし、教育布教活動を中心に教務本所運営の枠組みを作り上げた前田の功績は公平に評価されなければならぬ。廃仏毀釈と上知令のために甚大な打撃を受けた明治の仏教界において、激



藤田和敏 『悲劇の宗政家 前田誠節 臨濟宗妙心寺派の近代史』 (2021年10月法蔵館より出版、定価1,980円〈税込〉)

動する時代に対応できるだけの組織や制度を整備していく辛苦には並々ならぬものがあつたのではなからうか。現在の仏教界は、急激な人口減少とコロナ禍により従来枠組みを見直さなければならぬ段階にある。妙心寺派においても、僧侶の資質向上のために研修会を義務づける動きなど、様々な改革が始まっている。このような変革期だからこそ、我々は過去の歴史、特に身近な時代である明治以降の歴史の中から明日への教訓を読み取る必要がある。

◆プロフィール◆
藤田和敏氏
相国寺寺史編纂室研究員、花園大学国際禅学研究所客員研究員。
立命館大学文学部史学科卒業。京都府立大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学、博士（歴史学）。
著書に『甲賀忍者』の実像（吉川弘文館、二〇一二年）、『近世郷村の研究』（吉川弘文館、二〇一三年）、『近代化する金閣―日本仏教教団史講義―』（法蔵館、二〇一八年）などがある。